

問 ブルードンとか、バクーニンとか、クロボトキンとか、こういう偉い無政府主義者が、どんな考えをもっていたか、それを聞きたいと思うのですが。

答 そうでしょう。ごもつともです。わたしも殆んど知りませんが、いつかあとで、概念だけでも、受け売りして見るつもりです。

問 そうですか。じゃあとでね。ところでわたしが、もう一つ聞きたいことは、アナキストは観念主義者だ、アナキストは方法をもたないということをよくきくが、それに対するお答えを聞きたい。

答 観念主義というのは、さあどういったらよいか。昔、プラトンという哲学者がいたのです、ね。ところでそのプラトンがいうには事物の真相は経験（官能）によってではなく、観念（思索）を通じて示現されると考えた。彼は観念を全なりとした、実践は観念の従者であるべきだとした。

問 何だかへんちくりんね。そんなむずかしいことは厭だ。例でも引いて、ちょっと分るように言つてちょうだい。

答 彼はね、社会主義的理想を、最初に具体的に考えた人だということです。私有財産の否定とか、結婚法の改革とかをね。さて彼は、その考えを発表して、「人々よ、君達がそ

の氣にさえなれば、こうした社会は、今すぐでもできるのだ」といった。

問 ふうん、今すぐにも……！

答 それまで人々は、人間は無力だと思っていた。人間が何をどうしたいのだ、どんな社会を作りたいのだと思つても、思うだけでどうにもならないというような、一種の宿命観に支配されていたのだが、プラトンのこの思想——「なさんと思ひ、それをなさば、必ずなる」という信念は、人々を強く動かした。これ以来、人々は勇気づけられた。どんな困難でも、怯るまず乗り越えよう、という決心をもつことが、できるようになった。つまり観念の可能性を信じる、観念が母胎で実在は観念から生み出されるものだ、という思想が、即ち観念主義思想なのです。

問 いくらかわかつたわ。じゃあ実在が観念を規定するのだの、……近世婦人の解放にしても、先覚婦人が解放を叫んだから、解放されたというのではなく、産業革命が解放したのだというような、近頃流行の思想に対して、プラトンの思想は反対なのね。

答 近頃流行ではなく、そうした思想は、遠い時代からあつたのです。つまり宿命的、必然的の宇宙観です。それに対して、プラトン主義は人間の思索の自由、そしてその可能を説くものです。

問 無政府主義は、プラトン主義なのですか。

答 無政府主義——例えばブルードンも、バクーニンも「なせばなる」という思想のも

とに、突撃して行つたことは（もしくはその方法を説いたことは）事実でしょう。そしてこれは、今日のアナキストだつてそうです。然し、それだからといつて、このやりかたを単純に観念主義だといつてしまうことはできない。それよりも、われわれアナキストこそは、過去の哲学的形式——観念主義と経験主義との公式的二流派を打破した上で、それを包容するものです。

問 それはなぜでしょう。クロボトキンはどうなふうに考えたでしょう。

答 それです。クロボトキン以後、わたしがいまいつたようなことが、はつきり表面に現われてきた。クロボトキンは、事物を必然過程において見ました。例えば無政府主義の社会を来たらしめるということと共に、彼は一層、その社会は必然にくるというように言い、それを証明しました。また、農工分業の制度は否定されねばならないということと共に、それは必然に否定される、いや現に否定されつつあるというふうに言い、それをも証明しました。彼は現実社会の「無政府社会への必然的展開」をかく信じていました。故に彼の臨終は、レーニン政府の虐待のもとにありながら、非常に明るいものでした。

問 一寸、一寸待つて下さい。必然的過程の彼方に、アナキズムの社会を望み見る、即ちわれわれの究極の理想社会はアナキズムの社会だということは、レーニンもいっているそうですよ。

答 レーニンだけでなく、ブルジョアジーだつて言いますよ。今日「強権社会が正しい

か、自治社会が正しいか」といえば、誰だって、どんな保守主義者だって、強権社会を正しいということとは、言えなくなってきたのです。

問 一寸、一寸待つて……、じゃあ、昔はそれが言えたのですか。

答 ごく少数の人の意識には、微かに自治社会が望まれていましたが、全体的には強権主義万能であつたのです。ブラトンの社会主義社会も、強権的社会主義社会であつたのです。つまり、少数の知識分子が、中央集権制度の幹部級となつて、独裁政治を布くのです。(この制度は、個人的にはどんなに善良な人でも、駆つて暴君たらしめ、或はまた墮落幹部たらしめる。——こんど三派の無産党が合同して全国大衆党というものができた。その内部的の打ち合わせなるものをきくと、いわく、墮落幹部が出たからとて單純に排撃はすまい。むしろ外部に洩れないように庇つて行こう。そここのみこのさき勢力を増大する秘訣はある、とかいうのださうだから振つていますね。この制度は、幹部級のためには、非常によい制度です。だから幹部級になれる見込みのある知識階級とか、金持の坊ちゃんとかいうものの間に、マルクス主義が受け入れられる傾きの多いのは、一つはそのためです。ソビエト・ロシアをごらんさい。人民の生活からいへば、何一つ變つてはいない。ブルジョアジーの社会と同じように、事務員は事務所で、幹部から監督され、使い回され、賃金を貰つて食つてゐる。工場でもその通り、工場監督が、ちゃんと厳めしく控えていて、使い回してゐる。命令をきかねば首になる。労働者達は、ブルジョアジーの工場と、少し

の変わりもない賃金奴隷の生活をしてゐる。人から使われる生活をしてゐる。労働時間がどうだ、娯楽がどうだ、などということでは、ロシアの労働者よりか、アメリカの労働者の方が、ずっとろくな生活をしてゐる。これに反して自治制度というのは、幹部とか、監督とかいう者の全然いない制度で、つまり人から使われない、自分達だけで、協力してやつていく制度です。この制度は、今でも共產農村とか、共產漁村とかの間で、たまに見受けることができる。だが、それは原始的のものだから、将来は進歩的な形で、そうした社会が出現する。そしてそれこそわれわれの理想社会だということは、もう近代では、ブルジョアジーであれ、レーニンであれ、否定するわけには行かなくなつたからです。

問 そう、そうですね。じゃあその野郎どもとアナキストとはどう違うのですか。

答 その野郎どもは、口でだけそういうので、つまり胡麻化し的にいうので、現実における事物の発展を「無政府への発展」という具象的の意味において証明しようとしないうとしてゐる。その他クロボトキンが指摘したような、現在社会における自治的現象の遍満、もしくは展開というようなことに無関心である。第一、近世における自治意識の澎湃たる抬頭——彼等強権主義者が、強権社会を究極にまで正しいとはいわなくなつたのも、この意識におされてのことであるが——を、明確に意識のうちに受け入れようとしないう。彼等はかくの如く、自治ということを実際的にも、意識的にも、避けよう避けようとする。ま

た、故意に、意識的にそうしないまでも、強権主義思想の発展線（崩壊線）に沿っている彼等は、宿命的にそうである外はない。

問 だって、あの野郎どもも、究極の理想社会はアナキズムの社会だという。そんなら現在社会からの、それへの発展相が、それこそ観念的ではなく（理想としてのみではなく）実際の事物の具象的展開の上において、証明されねばならぬ。それでこそ科学的だといわれるのだから。いったいどうしたんだらう。あの野郎どもこそ、その点では観念主義者だらうか。

答 あ、あの野郎どもの哲学では、資本主義社会までが、唯物史観的の原理で証明される。時代はそこで終るのだ。そしてプロレタリアートの時代からは、観念主義——観念を駆使することによって實在（理想社会）を生み出すという、ツギハギのへんちくりんのものになるのだが……。

問 じゃあ、胡麻化し思想だといってしまえば、いちばん分りがいいんだな。近代詭弁派の上乗なものさ。わたしも偉くものしり見てえな言葉をいうようになったわね。ところで、無政府主義思想が、観念主義でも、経験主義でもないという、以前のお話の説明だが……。

答 ひとくちにいえば、「われわれがかく観念する」ということは、それが実現するという前ぶれだという意味において解釈される。だから狭い意味の実行の上でだけいえば、

従来の観念主義で、ちつとも差し支えない。だが、思想的にいえば「われわれがかく観念する」ということは、實在との関係において考えられねばならぬ。即ち實在が、既にその方向へ発展し始めているという意味においてだ。近代人が自治主義を正しと認めたしたのは、實在の自治主義への発展を物語るものである。（残念だがページがなくなつたから、次号でくわしく。どうも雑誌が小さいと困る）

(五)

問 あなたの話をきいていると、革命は人がするのではなく、自然がするということのように思われる。が、これは従来のアナキストの主張とは違っているようだ。

答 まちがつてはいけませんよ。私の話はそうではなかつた筈だ。私は革命は「人がするのと同時に自然がするのだ」といった筈です。「自然がする時、必ず人もまたそれをする」のです。

問 じゃあ近世の婦人解放は、近世の婦人意識が、それをしたのだといつていいわけね。マルキストにいわせると、婦人解放意識などは問題でない、近世の経済機構が婦人を解放したのだというのだが、あなたはどうなんですか。

答 婦人解放意識が生じたということは、既に社会の内部に、自然的にそれを可能なら

しめるあらゆる要素が生じたということの意味するものです。あらゆる要素は、単に経済機構のみにとどまらない。まだまだ多くのあらゆる要素があるだろう。

問 あるだろうなんて、何だか情けないわ。ちゃんとわかっていなくては、革命の方法がないじゃないの。

答 馬鹿な、人間の浅墓な頭脳の力で、そういうことが、完全に掴めると思うのですか。なるほど我々は、それを掴もうとは努力する。それが科学です。が、掴んだものを、完全なりと思ひ上がって、それを実践の根拠とすることは、非科学的にも甚だしい。

問 だって、例えばさ、何が婦人解放の要素だということが。ちゃんと分つていなくて、は戦術が立たないじゃないの。

答 戦術？ 戦術はね、我々の意識にのぼってきたものの、例えば婦人解放の意識なら意識を基準とすれば、それで十分なんです。御覧、ブルジョアジーが、意識より以外に何を自覚していたというんです。ブルジョアジーは、「婦人を解放」するものは、ブルジョア社会の内部の経済機構であるなどということは、ちつとも知らなかった。（一部にはそんなことをいう学者はいたとしても、ブルジョアジーがその説を基準として取り上げたわけではない）しかも、知らずにいて、ちゃんとするだけのことはした。婦人は解放された。婦人解放（もちろん近世的の婦人解放）に対して、ブルジョアジーが拠つてもって戦術としたのは、「万人平等、男女平等」——つまり極めて抽象的な意識に過ぎなかった。しか

も、それで結構よかったのだ。意識というものは、實在の総合的反映である。意識を信頼せずして、何が信頼できるのだ。意識をよそにして、「實在とは何ぞや」と、實在を探究するのはよい。それは必要なことだ。だが、一歩進んで、實在を掴んだ気になって、それによつて、実践の戦術を打ち立てようとするのは、危なっかしいことですね。

問 わかったわ。じゃあアナキストは、意識つまり観念に信頼するのね。それは従来の観念主義のような、観念こそ事物の根源であるという意味ではなしに、観念を實在との関係において、それを信頼するのね。例えばわれわれが、アナキズムを意識するのは、實在がアナキキーへと進展しつつあるからだというわけね。だから我々はそれを意識する。そしてそれから生れる実践とは、實在と相關的に、實在の進展を支持する、必然的の、つまり自然現象の一種なのね。共に。

答 なかなかむつかしいことを言うじゃないの。偉いねえ。

問 いやだ、煽てないでちょうだい。だって……。

答 あなたの言いたいのが、こうじゃなくて。つまりアナキズムが、観念主義でもなければ、経験主義でもないことが、やつと呑み込めたつてね。

問 そうよ、そうよ、でも以前のアナキストは、そのところ曖昧じゃなかったかしら。

答 それは曖昧だったさ。今でもそうさ。クロボトキンだって、意識的に、はつきり掴

んでいたわけではないさ。方法的に（無意識的に）そうであったというまでさ。

問 いやあ新アナキズムなのね。われわれのいつていることは。

答 新アナキズムなんて、気持のわるい言葉なんだが、まあ仕方がない。ここだけの造語さ。お前さんに説明するための、便宜上のね。しかもこの説は、わたし一個のものかも知れない、だからあなたの自由裁量にまかせましょう。

問 そうそう、もう一つ訊ねることがあるわ。それはね、アナキズムも、実在の進展ということを信じるとすれば、それは例の弁証法というやつじゃない？

答 さあ、むつかしくなったな。いったい、進展とか、発展とかいうふうに、宇宙や社会の現象を見るのは、もちろん今始まったことではない。——またこの次にしよう。

（六）

問 いろんなお話は、あと回しにしてちょうだい。だってあたし、方法のことたいへん聞きたいんだもの。

答 方法のことって？

問 まあ憎らしい。せん約束して下すつたじゃない？ ほらアナキズムには方法がないってことさ。そういつて輕蔑されるのがくやしいからさ。

答 ああそれか。それならくやしがるには及びません。なぜって、方法は搾取の別名だからです。

問 じゃあ最も搾取的な制度には、最も細密な方法が伴うってわけね。

答 そうです。例えば宗教を例にとりましょう。宗教が墮落して搾取的なものになると、必ず教会、または寺院組織が発達してきます。

問 一寸待つて。それでいま思い出したわ。組織や方法論にかけては、基督教の方が、ずっと仏教よりか偉いわね。仏教はやつと近頃になって、日曜学校だの、伝道だのと方法をすっかり基督教に真似しだしたのね。おかしいわ。

答 おかしいことはない。それは仏教が搾取的になつてきたという証拠です。いったい「アジア的」という言葉が、「ヨーロッパ的」という言葉と対立的に、よく使われているが、この場合、アジア的ということは、原始的または自治的ということの意味し、ヨーロッパ的ということは、文明的または政治的（搾取的）ということの意味している。すなわち搾取主義の最も発達したヨーロッパの宗教に方法が完備し、搾取主義の未発達なアジアの宗教が無組織的であるのはこのためでしょう。

問 そういわれれば、わが国の仏教の中でも割合に非搾取的な禅宗は、極めて搾取的な真宗などに比べると組織的でない。また世俗的の宗教——天理教などは、方法の発達していることにかけては、全く驚くほどだ。

答 だからさ、方法や組織の能力なんてものは、錯誤的の能力なんだ。人類社会に搾取の歴史が始まって以来、人類はそうした無用な能力のために、精力を消費してきたのだ。

問 でも、われわれが奴等と戦って勝つためには、組織が必要ではないでしょうか。

答 いや、勝つ必要はないのです。自然に勝つことができるまでではね。今までのアナキストは、無理に勝とうとした。それはアナキズムに反している。

問 まあ、何てことを、あなたはいうの。あたしには全くわからない。じゃあ、アナキストには、戦いはないのね。虐げられているものに、戦いがいなんて信じられないことだ。なさけないことだ。

答 アナキストの戦いは「自守」にある。即ちすべてのアナキストであるところの個人や、集団は、かたく自己を守るべきである。いかなる場合にも——ことに革命等の場合には一層——権力に服してはならぬ。いいかね、「勝とう」という欲望こそ、かえって権力の乗ずるところであることがわかるかね。従来革命では、「俺につけ」と叫びこんで出現する新権力を、民衆はお人善しだから、じきに信じてしまつて、そのいうなりに、血を流し、飢え、戦い、殺された。かくて我々を踏台にして、多くの権力者が、次々と登場してきた。だが生活は一向よくならない。損をするのは我々だけだ。今後はもうそうした一切の血まみれ騒ぎには御免を蒙つて革命の時などは殊にお召しには従いかねという自守的態度をとるべきだ。

問 何だか少し分りかけてきたわ。じゃあ流血を超えて、権力を戦いという、従来の考え方を、すっかり捨ててしまふわけなのね。

答 アナキズムの精神や、いわゆる方法は、将来の一切のそれらと、全然に相反するものであらねばならぬ。流血を超えてという考え方は、人類の幼稚な時代の、お人善しの夢です。なるほど少数権力者にとっては、人類をいつまでもそうした夢にひたらせておく方が、都合がよいのだが。

問 じゃあ、強権と戦え、革命をなくしろつて、突撃するやりかたは、幼稚かしら。

答 そのやりかたは、権力主義者に利用されます。かのロシア・ボルシェヴィキの首魁レーニンなんか、「無政府主義者や虚無主義者は革命の捨石として重宝だ」といつている。

問 では、あたし達今日の自覚したアナキストは、いかに生くべきだろうか。

答 待つてらっしゃい。だんだんとお話していきますよ。が、ひとくちに言えばね、まず思想的に、「反強権」の信念をかたく持つ（時に死守となるもやむを得ず）こと、第二に経済的に、自治へ、自給自足へと、一歩でも進もうと心がけることなのです。あとはまた……。

問 思想的に「反強権」の信念をかたくもつてのは、あたしよく分つてよ。だけどその次——経済的に自治へ、自給自足へと、一步でも進もうと心がけることつての、少し分らないわ。

答 ふん。じゃああんたはね、こう言いたいんでしょ。そんなことは不可能だと。

問 そうよ。いくら経済的に自治へ、自給自足へと、進もうと思つたつて、現在の資本主義社会では、どうにもならないじゃないの。だからこの社会を破壊すること——それだけが、われわれに与えられた、政治的経済的行動なんだ。

答 この社会を破壊すれば、直ちに自治と自給自足の社会がくる——あんたはそう思うのね。もつとも従来のアナキストは、一般にそう思つていたらしい。だが、自治だの、自給自足だのつて社会が、おいそれとくるだろうか。人間の生活が複雑になつてゐる今日、それを単純化する機械の發明とか、その他生活環境や関心の發展とかがなくては、不可能なことのようだ。

問 呆れた。あんたはあのマルクスの経済史観を奉じているように見えるわ。

答 経済史観はマルクスの専売特許ではない。マルクス以前に発生したところの、近世社会主義共通の産物だとさ。ただ、それをいかに解釈するかということの、立場の相違が

ある。

問 ふうん、分つたわ。じゃあ彼等は経済の發展というものに、百パーセントの信頼をおいてゐるのね。あんたはそうでなく、われわれの欲求する（それは常に現経済制と反対の）経済制への意識を確持し、且つそれへと努力することが、現経済制を幾らかづつ変えていく一つの原動力たりうるという主張なのね。

答 なかなか偉いな、あんたは。そうだ、今日のような複雑な分業制度を生み出したのだから、単なる「経済力の發展」のみではなく、そうした制度に対する支配者の欲求の反映でもある。例えば機械の發明だつてそうだ。蒸気機械なんてものは、たしかに支配者の機械なんだ。

問 そこでどうなのね。民衆は飽くなく自由を望む。自由の究極が、自治と自給自足にあることは、近世における主要な社会主義が、等しく認めることなのね。貨幣の廃止、商業の廃止、賃金の廃止なども、それへのほめかしなのね。

答 それへのほめかしなんて……、ずいぶん言いにくい言葉を、あんたはいうのね。まあ、いいさ。いうことは分るわ。ほめかしであらうと、なからうと、とにかく自治、自給自足の欲求の確持こそは、科学上の新発見、機械の新發明、生活環境の徐々たるそれへの推移の、何らかの原動力たりうることを、わたしは信じる。かくして今すぐから、そして速い彼方へ、そうした社会が展けていく。

問 分った。現経済制のもとでは、殆んど空しい夢であり、努力であるにしても、それへの欲求を持ちつづけることと、どんな形にしろ、一步でもそれへ近づこうと努力することが必要、いや必然だというわけね。

答 そうです。今日では「何らかの形への努力」なるものは、ほんとうに空にひとしいことなのだ。殊に都会では殆んどだめ。農民では共同耕作とか、生活必需品の自給自足とか、不景気の時などは、やや何らかの形が出てくることもある。革命などの時は、それがかなり大きく出てくる。それを——それがたとえれば大きな反動の波にさらわれてしまふものであるにしても、アナキーへの欲求と努力、従って実現への意義を、そこに見出したいのだ。

問 「反動の波にさらわれる」だの、「であるにしても」なんて、ずいぶん心細いのね。じゃああなたは、こんど革命がきても、必ずしもアナキーの社会はこない。何らかの新政府が出現するかも知れないって思つてやしない？

答 思つてる。

問 まあ、何てなさけないことだろう。じゃあボルシェヴィキに味方した方がよさそうね。

答 お望みならば！ だが、ボルシェヴィキの社会が、何を民衆に約束することが出来る。そこには矢張り、人が人を監督し、使役する、賃金労働の監獄部屋があることに変

りはない。少しばかり労働条件が改良されるぐらいの違いならアメリカを見るがいい、アメリカの資本家統治だろうと、ロシアの官僚統治だろうと、最下層の民衆にとつては、何の違いもありはしない。そこで我々の態度はきまつている。未来永劫まで頑としてアナキストであることなんだ。眼前の現象に囚われずにね。だが、それと同時に、眼前の現象を、たえず鋭く批判しながらね。

(八)

問 お話よくわかつたわ。この次あたりからアナキズムの歴史についていったようなこと、聞かしてちょうだい。

答 よろしい。わたしはまるで知らないのですが、この次あたりから、誰かの受け売りでもすることしましょう。

問 いかにもあなたは、そんなようなこと言つたわね。アナキストでいながら、アナキズムについての知識がないなんて、ずいぶん不便でしょう。

答 不便です。いったいアナキストは、共通的に知識に暗い。知識を利用して、うまくごまかすという愉快(?)な仕事、アナキストにはないものだから。

問 でも、知識欲は、そうした動機とは、また別なものではないかしら。

答 そうです。が、ほんとうに知識欲のために、知識を追求しているような人は、今日の世の中には、非常に少い。第一われわれの知識欲は、芽生えのうちから、色々な煩らわしい生活関係のために、摘みとられてしまうのです。

問 で、つまりあなたもそんなのね。知識欲のすりへらされた人、それがあなたなのね。

答 そうです。

問 つまらないな。

答 ……。

問 あたしアナキズムに不満なのは、何だか頼りないって気がするものなの。

答 なぜですか。

問 じゃあ言うわ。きのうある友達が、あたしにこういったの。アナキズムは空想だって。アナキズムは遠い遠いお伽噺の社会を夢みているのだから。

答 無政府共産社会つてのをですか。そのことについてはあとでいうが、そういえばマルキストだってそうではないか。彼等は近頃、ことにそんなことをいうようになった。われわれの理想社会は、無政府共産の社会だと。

問 でも彼等は、その社会に行きつくために、強権的過程を通るのだというのです。ことに今日の社会は強権的の社会だから、今日の社会にあつて、「実行」的でありうるためには、同じ強権的方法によらなくては、それは不可能なのだそうです。

答 だからさ、無産党の諸君の間でも、それと全く同じことがいわれているわけだ。非法主義（ボルシェヴィズム）は空想でしかない。今日の日本の社会は議会主義の社会だから、今日の日本にあつて、「実行」的でありうるためには、同じ議会的の方法によらなくては、それは不可能だとな。

問 なるほどね。してみると「実行」つてことは、墮落つてことかしら。

答 さあ、墮落かどうかわからぬが、とにかく妥協つてことだ。結局は同化（支配階級と）つてことだ。いや最初からそうなんだ。

問 じゃあ、われわれ今日の全人類の希望が——ボルであれ、アナであれ——、無政府共産社会にあるとすれば、空想といわれようが、お伽噺といわれようが、その意識——無政府共産意識を、不滅の神燈を守る人々のように、かたく守り続けていくことが、われわれアナキストの務めなのね。その社会を早くこさせたいと思つて、強権意識へと乗り換えたりすれば、かえつていろんなことになってしまうわけね。

答 ずいぶん色々いうのね。お茶でも飲まない？

問 まあ、いじわる。じゃあどういったらいいの。あたしのいうこと、まちがつてる？

答 ううん。まちがつてやしない。ただ「われわれは今日あるを知つて明日あるを知らず」なのだ。明日の世界のことを空想して、それに全幅の信頼をかけて、それに向つて、「現実を犠牲にして」進むなどという態度は、よほどおめでたい態度だ。

問 そんならアナーキズムは、遠い世界を目掛けて進んでいくのではないのですか。
答 そうです。アナーキズムの世界は今日すでに実在します。政権を獲得すればだの、政府を倒してしまえばだのと、分りもしない先のことに望みをかけるべく、われわれはあまりにも現実的です。われわれは現実的に「綱」なくては何事をも信じることはできない。
問 まあ、それでは無政府共産社会を、今日から直ちに綱むのですか。
答 そうです。まず態度において、次に共産への意志と努力において、いますぐに。
問 じゃあ、アナーキズムこそ、空想主義でなく、最も現実主義なのね。ぜひこんどそのことを、聞かしてちょうだい。

後記

この小冊子は、昭和五年三月に創刊され、翌昭和六年六月まで十六号にわたって発行された『婦人戦線』誌より、高群逸枝の執筆した諸評論を採録したものである。同誌には、評論の他に小説、詩等の創作が七篇余り掲載されているが、これは割愛した。次にその初出を列記する。(後の部分は第Ⅱ集に収録)

婦人戦線に立つ

一号(昭五・三)

アナーキズム文芸の態度

〃

我国マルクス婦人の頭脳拝見(1)~(4)

〃 〃 四号

家庭否定論

二号(昭五・四)

無政府主義の目標と戦術

四号(昭五・六)

プロ婦人と男性批判

〃

無政府主義と性の処理

五号(昭五・七)

無政府主義問答(1)~(8)

〃 〃 十二号

わが国男性諸君に見参(1)~(5)
 生田花世さんへ私信がわり
 無政府恋愛を描く
 美人論―都会否定論の一
 階級道徳と無政府道徳
 高群逸枝―わが恋の記
 我等の婦人運動
 私はこう思う
 婦人戦線一年・婦人思想史
 随筆・夜を行く
 恋愛と性欲
 現行国定教科書批判(1)~(2)

五号~九号
 六号(昭五・八)
 七号(昭五・九)
 八号(昭五・十)
 九号(昭五・十一)
 十号(昭五・十二)
 十一号(昭六・一)
 十二号(昭六・二)
 十三号(昭六・三)
 十四号(昭六・四)
 十五号(昭六・五)
 “~十六号

※文中、傍点を付した個所は削除部分をおこしたことを示す。